

# 滋賀県湖北地方のオコナイとその建築

祭礼建築論の試み

黒田龍二

Okonai and Architecture in the Kohoku Area of Shiga Prefecture: An Experiment in Festival Architecture Theory

はじめに

- ① 問題の所在
- ② 湖北のオコナイとその建築の概要
- ③ 切妻型の堂
- ④ 入母屋型の堂・社
- ⑤ 浄信寺(木之本町)地藏堂のオコナイ
- ⑥ 切妻型と入母屋型の分布と歴史的領域性
- ⑦ 切妻型、入母屋型の成立事情

むすび

資料編 1・2

## 目次

日本各地の祭礼の研究は民俗学を中心に膨大な蓄積がある。一方、建築史学においては、神社建築の歴史的な研究また文化財調査や発掘調査による即物的研究が積み重ねられてきている。近年にいたり、寺院建築に関してはその機能たる法会あるいは寺院社会との関わりに関する研究が深まりつつある。その反面、多くの場合は神社がその場となる祭礼と建築の関係に関する研究は、いまだ緒についていない。その原因は、祭礼が多様な側面をもつ複合的な存在であって、建築との関連を見据える視座が定まらないためである。本稿は、そのような視座の確立を目指して、滋賀県湖北地方のオコナイとその場となる建築との関係について考察した。

湖北のオコナイの場となる神社は、形態的に二種類ある。ひとつは切妻型の大規模な堂で木之本町、余呉町の山間部に十棟、もうひとつは方三間以下の規模の入母屋型のもので、こちらは仏堂・神社本殿の区別がなく、高月町、湖北町を中心とする平野

部に約七十棟を数える。これらの建築形態の相違に関係するのは宮座行事であり、儀礼的な飲食を中心とするシユウシ座の行事が、切妻型では堂で行われ、入母屋型では頭屋宅で行われる。シユウシを堂で行う場合は村人の人数に限りがあるが、頭屋宅で行うなら村内を組分けしてそれぞれに頭屋をおけばよいから、村の発展と人口の増加に対応できる。切妻型のオコナイはモロト村の有力者主導の形跡があり、中世的な組織に起源をもつ。入母屋型のオコナイでは村人の平等原理、座敷をもつ民家の広範な成立が社会条件であり、それは近世後半以後近代へかけての村落社会の発展に対応したものである。

祭礼と建築の関係を見るには、祭祀、芸能風流、人的組織などのどの事項が場の形態に関わるのかを検討することが有効である。オコナイを宮座行事としてみるなら、比較対象となる事例の範囲は一挙にひろがることになるのである。